

いかにして学生のモチベーションを維持するか

ギンター 知枝

(徳島大学全学共通教育センター 非常勤講師)

1. はじめに

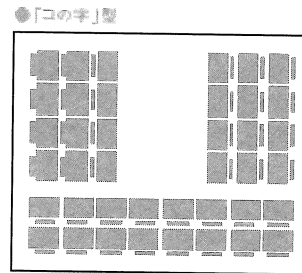
一般教養教科の授業、なかでも第二外国語の授業は現在非常に難しいポジションに置かれている。多くの大学において学生に義務付けられている第二外国語の履修期間は半年から一年と短く、これは初修の語学を学ぶには何とも中途半端で不十分な期間である。もしも中学生が英語を1年しか勉強しなかったとしたら、はたしてそれで十分であるという人がいるだろうかと考え、誰にでもその不十分さが理解できるであろう。もちろん学生もそれを理解しており、はじめから単位取得のための履修とわりきって参加するものも少なくない。また、最新のテクノロジーを享受しつつ育ってきた学生にとって、何かわからない時には電子辞書、インターネットなどを利用すれば手軽に情報をえることができるという考え方が当たり前であるため、実用に結びつかない「知識」としての文法や単語を暗記させることは非常に困難である。そのような状況の中でいかに限られた時間を有効利用し、学生の授業に対するモチベーションを維持するか、第二外国語を学ぶ意義やメリットをどう提示していくのか、というのが教師に与えられた課題である。

そこで、少しでも学生に「学ぶ当事者としての自覚」を持ってもらい、短時間で印象に残る方法で効率良く学ばせるために私が行っているいくつかの方法を紹介し、学生の反応と期待できる効果を報告したい。

2. 学習環境

単純なようで重要なのが机の並べ方である。教卓に向かってすべての机が何列にも並べられている状態では、教師の目が全体に届かないのみならず、学生同士もお互いに他の学生が何をしているのか、誰が発言しているのかが分かりにくい。

そこで図のように教卓の部分を開口部にコの字型に机の並べ替えを行っている。



これは学期の始めに学生に説明し、授業開始までに並べ替えが完了しているようにさせている。こうするメリットは、全員が顔を見ることができ、クラスに一体感が生まれること、「後ろの席」が存在しないため、他人の背中に隠れて授業に参加しない学生がいなくなる、パートナー学習が容易になることなどである。学期末に行われるアンケートでも、「自分が参加しているという自覚が生まれた」「このほうが楽しく勉強できる」と学生に好評であった。

3. 講義の方法

私は、講義とはある種のプレゼンテーションといえるのではないかと、という考えから、優れたプレゼンテーションとはどういうものかを念頭に置いて授業を行っている。例えばこの分野では誰もが認めるスティーヴ・ジョブズはどのようなプレゼンテーションを行っていたのか。様々な特徴のなかで私が注目したのは「10分ルール」「小道具を利用する」「体験を共有する」である。認知学でも実証されている「人は10分以上集中できない」という考え方をもとに、一つの課題や説明が10分以内で終了するように気をつける。実際、それ以上になる場合には目に見えて集中力が衰えてくるので、必要であれば前もって「この説明は長くなるけれどどうしても必要だからがんば

ろう！」などと宣言し、説明の途中にも集中力がとぎれないよう必ず声をかける。そうすることで若干であれば長い時間でも集中させることはできる。「小道具の利用」や「体験の共有」では、次のようなことも行っている。何かを記憶しようとする時、「書く」「ゼスチャーをつける」「絵として覚える」など、ほかのことと組み合わせることで記憶の効率が上がることや、自分が好感を持つキャラクターや印象的なキャラクターと結びつけると記憶しやすいことを利用し、覚えにくい文法の表をそのまま替え歌にして全員で歌って覚えさせたり、位置関係（前置詞）を覚えるのにぬいぐるみを利用して覚えさせたりする。すると、無味乾燥で記憶しにくい文法項目をすべての学生が10分以内に暗唱することができるようになる。これは今まで担当したどのクラスでも同じ結果であったため、このような内容も一人ではなく、誰かと一緒に印象的な方法で覚えると記憶に残りやすいことが確認できた。また、人との接触に敏感であったり、目を見て話すことに抵抗のある学生もいるため、あいさつをしながら握手する、というような練習の場合に人の代わりに人形と握手させる。（どうせ使うのであれば人形は可愛い方が効果的である。）人形の手を差し出すのは隣に座っている学生であるが、かわいい人形にあいさつすることを意外なことに男子学生もが楽しんでいることが観察できる。

4. 目的と可能性の提示

人がものを買うとき、最後に何が決め手になるのか。それは、その製品がどのように自分の役に立つのかが実感できるかどうかという点ではないだろうか。ドイツ語を学ぶことでどんなメリットがあるのかを学生に伝えるのはそういう意味で非常に重要な点であると考え。私は常に、ドイツ語に限らず外国語を学ぶ重要性とメリットを学生に伝えるよう気を配っている。まず伝えることは英語の重要性。今は外国に行くつもりがなくても「成績が優秀で、外国で行われる学会で発表する機会を得る」「就職した会社が海外進出して海外出張や駐在を命じられる」「外国人の顧

客・患者などへの対応を命じられる」「家族が外国人と結婚する」など、英語が必要になる可能性は思ったより高いこと、英語が話せることでチャンスをつかめる可能性があることなどをことあるごとに話して聞かせる。そして次に、「基本的に英語など誰でも話す時代に移行しつつあること」「そこで他人と差をつけるためには第二外国語の能力がものをいうこと」を伝えるようにしている。

また、ドイツという国はどんなところなのかということ或少しでも理解し、「こういう国の人とコミュニケーションできるようになる」という実感を持ってもらうためにドイツの街を紹介するビデオなども学生に見せている。その他にもドイツ語の具体的な使い道の一つとして、「一般社団法人 国際交流サービス協会」という団体から海外の日本大使館や領事館に派遣されて3年間働くチャンスを得られる「外務省在外公館派遣制度」を紹介している。

<http://www.ihcsa.or.jp/zaigaikoukan/hakenin-1/>

実際に私の友人は応募人数が少なくライバルがやや少なめの、ドイツ語を使うポジション（ミュンヘンの日本大使館）に採用され、優秀さが認められてそのまま外務省の正規職員に採用されている。そのようなことも含めて学生に話をし、ウェブサイトのURLを教えてどのようなものなのか各自確認するようにさせている。その結果学生の中には、ドイツに行ってみたいという者や、プラスアルファのスキルとして自主的にドイツ語の検定試験に向けて学習しはじめた者も出てきた。

5. まとめ

時代は変化し、語学の学習方法も学習目的も刻々と変化している。これからの語学教育は従来の方法にこだわることなく、新しいメディアや教授法を取り入れて、今の学生にあった方法で行われることが望ましい。アクティブラーニングや反転授業など、取り入れる価値のありそうな新しい教授法をリサーチし、改善を続けていきたい。